

「インドネシア大学派遣参加報告書」

京都大学法学部 1年 黒田 航

このインドネシア大学のプログラムに参加したことで、私は学習成果として大きく2つのことを獲得した。まず、異文化を理解する力を洗練させることができた点である。インドネシアは世界最大のムスリム人口を有する国であるが、その国に住む人々の人種や宗教は実に多様である。彼らは互いに寛容であり、いつも笑顔を欠かさない。そんな人々と日々交流することによって、自分と異なるものへの対応を学ぶことができた。この姿勢は、今後の海外だけでなく国内での生活においても欠かせないものである。また、インドネシア語の初歩を身につけることができたことも大きな成果である。2週間という限られた滞在期間であったが、インドネシア人の友人だけでなく日本人の友人とも、毎日できる限りインドネシア語での会話をしようとしたことで、実践的に上達することができたと確信している。これからも実践的にインドネシア語を練習していきたい。

インドネシアを訪れるのは今回が初めてであったが、私はインドネシアのことが心から好きになった。まず何と言っても、人々が親しみやすく優しい。私たちはインドネシア大学生といつも楽しい話をすることができたし、困ったときには彼らに助けをもらった。感謝してもしきれないほどである。次に、インドネシアの食べ物のすばらしさは驚くべきものである。味はさることながら、種類の多さ、価格も魅力的である。ワルンという屋台のような店が数多くあり、そこで幾度となく食事や買い物をした。そして、これはいささか意外かもしれないが、交通の便利さも忘れてはならない。たしかにインドネシアでは日本ほど公共交通機関がまだ発達していないかもしれないが、GOJEKというアプリが非常に普及していて、すぐにバイクやタクシーを呼ぶことができる。そして私の経験上すべての運転手はフレンドリーで親切である。

インドネシア大学スプリングスクールのプログラムは、インドネシア語の講座、文化体験、プレゼンテーションから主に構成される。インドネシア語の講座は、話すことを通して表現や単語を学んでいくものであった。ネイティブの先生の発音を真似ながら、京都大学生同士で会話をした。一度だけだが、キャンパス内の見知らぬインドネシア大学生に道を尋ねる練習も行った。全体を通して、日常的な内容を実践的に学習することができた。文化体験として、私たちはガムランおよびアルンバを演奏したり、バティックのハンカチを創作したりした。ガムランもアルンバもインドネシアの伝統的な音楽で、演奏は難しかったが、みんなで1つの曲を演奏したのは愉快なものであった。最後にプレゼンテーションについてだが、私のグループはインドネシアと日本のデート文化の違いについて比較した。インドネシア人は恋人を両親に紹介する人が多いが、日本人は恋人の紹介に消極的であるなど、様々な違いが見られて興味深かった。プレゼンテーションの準備を通して、インドネシア大学生とより仲を深められたのも良かった。

今回の体験を通して、私はインドネシアに対してさらなる好奇心を抱いた。次は今回訪れなかった地域に行ってみたいし、今回食べなかった食べ物を味わってみたい。インドネシアでやりたいことが一層増えるばかりである。もっと言うならば、私はインドネシアに住みたいと思っている。インドネシア語の学習はこれからも続け、インドネシアで働いたり、インドネシアに関わる仕事をしたりすることも視野に入れている。そして何より、今回得た最も大切なもの、インドネシア大学生と築いたすばらしい関係は、将来にわたって継続していきたいと考えている。